

# 和歌山県内の獅子舞にみる芸態および音楽的特徴の考察—日高郡を中心に—

大阪芸術大学 音楽学科 特任准教授 出口実紀

昨年度より継続して、和歌山県内の獅子舞研究を遂行した。昨年度は御坊市、印南町、田辺市を主な対象として各地の獅子舞調査をおこない、田辺市の獅子舞は三重県を拠点とする大神楽系統が多く、御坊市と印南町の獅子舞では芸態や音楽に類似点が少ない等、獅子舞の系統伝播に一定の境界線を引くことができた。一方で、御坊市より北に位置する由良町の獅子舞は御坊市の獅子舞と共通点を多く見いだせたことから、今年度は日高郡内の獅子舞を中心に調査を実施した。

下記に、今年度調査を実施した印南祭（印南町）、寒川祭（日高川町）、万呂の獅子舞（田辺市）、由良の獅子舞（横浜）について報告する。

印南祭は、印南八幡神社と山口八幡神社の氏子域で構成される。芸態は二人立ちの獅子で、各地区の獅子には鉦とササラを手にした二名のオニが付き、華やかな衣装を着した「打ち廻し」と呼ばれる男児二名が太鼓屋台に据えられた太鼓を打つ。獅子はオニの先導で舞場全体を広く動き、途中筵の上で中入りをした後再び舞場全体を移動し、最後は獅子屋台の前で舞う。音楽的特徴としては、獅子が敷かれた筵の上に到着すると笛の囃子（旋律）に合わせて歌が付けられる。また笛の演奏には曲の切れ目が無く、獅子の舞始めから終わりまで途切れることなく演奏される。囃子全体のテンポは緩やかで獅子が筵を出ると囃子のテンポが徐々に上がり、獅子が獅子屋台の前に来ると最後の囃子が奏される。印南祭ではこのような各地区の獅子舞以外にも、楽器による囃子（演奏）が一切付かず無音の中で舞われる「重箱獅子」と呼ばれる芸態も奉納される。

由良祭は宇佐八幡神社の祭礼で、氏子域より六地区が獅子舞を奉納する。昨年度に本宮の調査を実施しているため、今年度は横浜地区の練習を調査した。獅子は二人立ちで、敷かれた筵の上を中心に動き、舞の途中に獅子頭を持つ舞手が肩車された状態で体を沿ったりする動作が見せ場の一つである。囃子は笛、太鼓、小太鼓、ちゃみせんで構成され、笛以外の楽器はすべて子どもが演奏する。中でも小太鼓が囃子のテンポを示す重要な役割である。印南祭や御坊祭の獅子囃子と同じく笛は曲の切れ目が無く演奏されるが、テンポが緩やかになったり速くなったりの緩急が随所にみられる。

寒川祭は日高川町・寒川神社の祭礼で、四人立ちの獅子に警護としてオニとワニが付く。本宮では神社での奉納後に御旅所へ移動

し、再び神社へ戻って獅子舞が奉納される。また、神社から御旅所への道中も「道中神楽」と称して練り歩く。芸態の特徴としては四人立ちの獅子で、且つ先頭の舞手が両手に鈴などの採物を持つため獅子頭を二番目の舞手が持つ事や、舞手全員が同じ足の動きをする、奉納の最後にお多福が現れる点などが挙げられる。囃子は笛、太鼓、鉦（ちゃんちき）で構成され、《剣の舞》《鈴の舞》と称される曲が演奏される。また、笛の旋律の一部に御坊祭の囃子と同じ順次進行による陰旋音階が使用されている事が分かり、音楽面の考察材料として大きな収穫を得た。

万呂の獅子舞は、田辺市万呂の須佐神社の祭礼である。万呂では二頭の獅子が同時に奉納をおこない、「ほしかろ」「ケツ持ち」など舞手に名称が付けられている。獅子幕の中には複数名が入り、獅子のほかに天狗やお多福が登場する。囃子は笛と太鼓、締太鼓で編成され、太鼓と締太鼓の両方を一人が担う。この万呂の獅子舞では、御坊祭や御坊周辺の獅子囃子で伝承されている《ゴシヤク》の曲名をもつ囃子がある。

以上のように、芸態は地域によって多様であるものの和歌山県紀中地域や日高郡内、田辺市の獅子舞にみられる音楽的要素として《ゴシヤク》と呼ばれる曲を伝承する地域が多く分布している事に改めて気づかされる結果となった。県内の獅子囃子を考察するうえで重要な曲と位置づけられるものの、その伝承や内容については未詳であり旋律も同一ではない。先行研究によれば、由良町の阿戸では笛の旋律を覚えるために歌詞（唱歌）を付けて練習するとされ、その歌詞に「殿にもらった五尺の手ぬぐい、おいてきたぞよ長崎へ…」とあり、曲との関係性が指摘されている。また印南町の獅子囃子にも歌が付くため、今後《ゴシヤク》および歌付き獅子囃子についての調査を継続して実施する。

## 【参考文献】

『由良祭の文化財』第20号、由良町教育委員会、1993年

『和歌山県の祭りと民俗』和歌山県民俗芸能保存協会（編）、2021年